

「風？ いえいえ、これも海の生きものです。トビエイというからには、飛ぶのでしょうか？」山口敦子教授に解説していただきました。

翼のような胸びれを羽ばたかせて泳ぐ

「トビエイは、北海道以南の日本沿岸から南シナ海にかけて分布します。トビエイ属を表す *Myliobatis* とは、*Mylio* (碾き臼) と *batis* (平たい魚) から成る言葉で、すり潰し型のプレート状の歯を持つエイを意味します。また、種小名につけられた *tobiei* は、トビエイという日本での呼称そのものです。翼のような胸びれを羽ばたかせて泳ぐ姿が、鳥の「鳶」に似ているためでしょう。長崎周辺では「鳩エイ」と呼ばれる一方で、英名 *Japanese eagle ray* は「鷲」に因みます」

名前の由来は「飛び」ではなく、鳶なんですね。

「頭はまるで鳥の嘴のように見えますね。トビエイの頭部の先端は、もともとは胸びれに由来するもので、「頭鰭」と呼びます。頭鰭を持つのはトビエイ科の特徴。トビエイ類は、サメから進化して海底生活に適した体を持つようになったエイの仲間から、再び遊泳生活に適応していったグループであると考えられています」

生態についてはほとんど不明で、現在研究中です。これまでに採集したトビエイの体の幅は、最大でも雌では約は、その身はほどよくふっくらし、湯引きや唐揚げ、煮つけなどで美味しく食べられます。魚を知れば、おのずとその食べ方もわかってくるものです」。

なるほど、秋はエイも太り気味になって食べごろになると。「でも棘には注意が必要です。グラバー図譜では尾部に二本の棘が描かれています。通常は一本ですが、何かの理由で棘を失うと新たに生えてくることもあります。棘の周囲は鋸の歯のようので、いったん刺されれば引っ張っても抜けず、毒腺からは毒が分泌されるため、ひどく痛みます。人間がエイに手出しをしたなら、猛然と鞭のような尾部を躍らせて攻撃してきます」。

オランダへ渡ったトビエイの標本

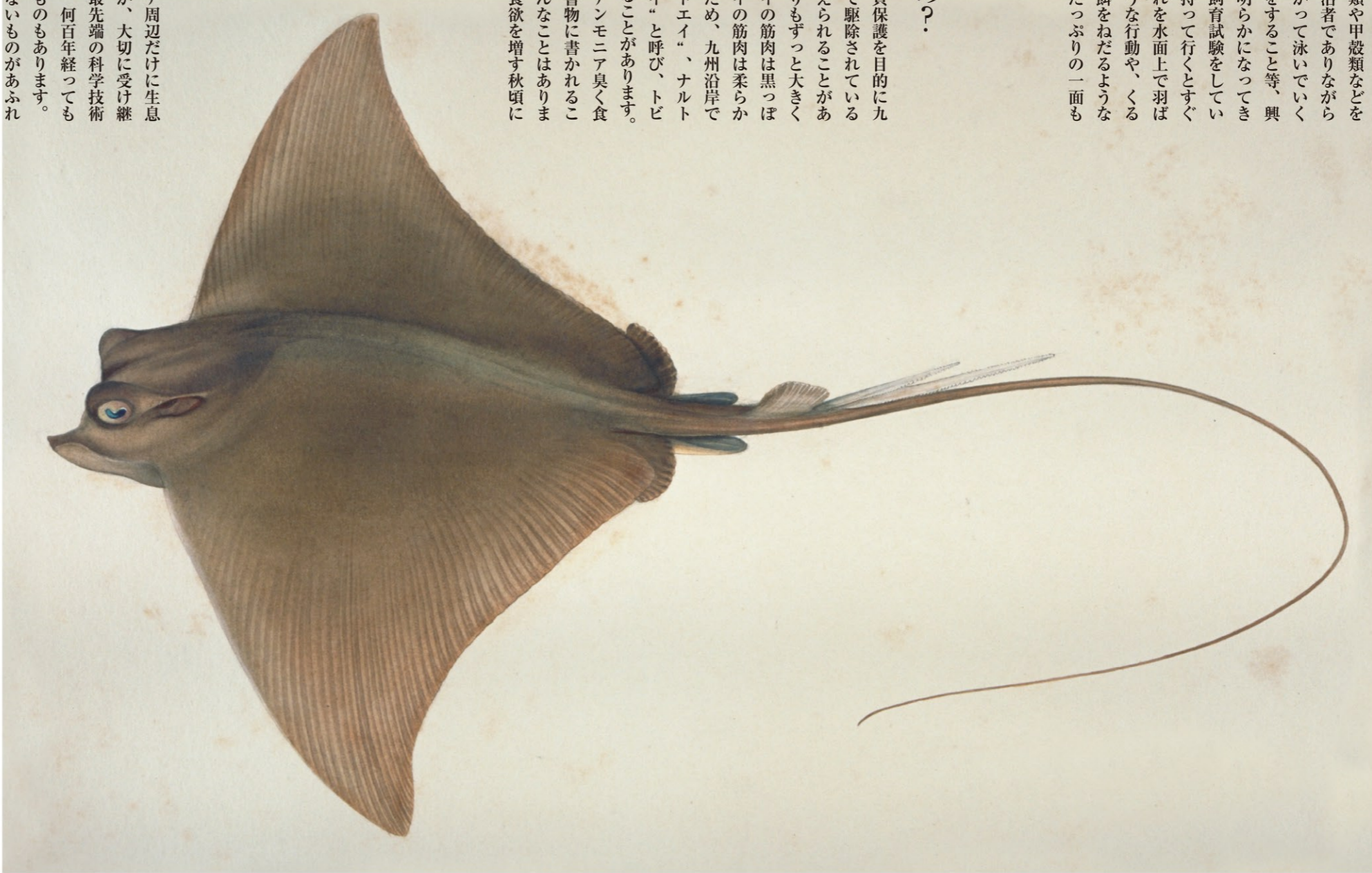
「今年の春、オランダのライデン自然史博物館を訪ねました。鎖国時代に長崎・出島に派遣され、文化や動植物など、ありとあらゆる日本をオランダに伝えたシーボルトの功績により、ライデンで出会った人は誰もが長崎を知っていました。博物館には日本由来の貴重な生物標本が多く保管され、なかには、トビエイの正模範標本(種の根拠となる重要な標本)も含まれています。トビエイは、長崎で採集された個体に基づき、一八五四年にドイツ人医師で魚類学者でもあった Bleeker によって初めて記載されました。穏やかな時間が流れるライデンで、

1m、雄では約六十cm程度で、トビエイ科の中では小型の部類に入ります。雌は雄の約二倍長い寿命を持ち、十五年程度は生きるようです。晩夏に、沿岸の浅瀬で手のひらほどの幼魚を二十尾出産します。貝類や甲殻類などを主な餌とする底生生活者でありながら頻繁に中・表層に向かって泳いでいくことや、長距離移動をすること等、興味深い生態が徐々に明らかになってきました。トビエイの飼育試験をしていたこと、餌を持って行くときにすぐに寄ってきて、片ひれを水面上で羽ばたかせ呼び寄せるような行動や、くるくると旋回しながら餌をねだるような行動を見せる、愛嬌たっぷりの一面もありました」。

トビエイは やっかいもの？

「トビエイは、二枚貝保護を目的に九州沿岸や瀬戸内海等で駆除されているナルトビエイと間違えられることがあります。トビエイよりもずっと大きく成長するナルトビエイの筋肉は黒っぽいのに対し、トビエイの筋肉は柔らかく赤味がかつているため、九州沿岸ではトビエイを「赤ハトエイ」、ナルトビエイを「黒ハトエイ」と呼び、トビエイの方を食用とすることがあります。トビエイは不味でアンモニア臭く食用とはならない、と書物に書かれることもあります。そんなことはありません。出産を終え、食欲を増す秋頃に

百六十年以上も前に長崎で採集された標本を手に取っていると、何とも不思議な感覚がしてきました。ライデンでは標本の維持管理に多くの人員が配置され、日本を中心としたアジア周辺だけに生息するトビエイの標本が、大切に受け継がれているのです。最先端の科学技術も素晴らしいけれど、何百年経っても変わらず価値のあるものもあります。身近にもかけがえのないものがあふれていること、それらをきちんとした形で遺し、後に伝えていくことの大切さを再認識した旅でした」。



解説 山口敦子

長崎大学水産・環境科学総合研究科教授

Yamaguchi Atsuko

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。2000年から長崎大学。専門はエイやサメなど魚類学と水産資源学の研究。主な著書に『干潟の海に生きる魚たちー有明海の豊かさ危機』(東海大学出版)など。

Glover Atlas

トビエイ

Myliobatis tobiei

画家 長谷川雪香

グラバー図譜

日本西部及び南部魚類図譜

Fishes of Southern & Western Japan

長崎大学附属図書館のホームページでもご覧いただけます。

<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/GloverAtlas/>